

りの直木賞作家 の軌跡を 振り返る

没後30年——本誌ゆか 胡桃沢耕史氏 研究者と

前田連望氏

30年前の3月28日、ひとりの売れっ子直木賞作家が68歳で鬼籍に入った。本誌の黎明期から長きにわたって軽妙洒脱な名文を寄稿してくれた胡桃沢耕史氏だ。本名の清水正二郎時代にお色気もので名を馳せたのち、作風を一変させ、重厚な小説で念願の直木賞を「狙って獲つ

た」異能の人でもあった。1年後に創刊60年を迎える本誌の歴史のうち、胡桃沢氏との付き合いは25年に及ぶ。改めて感謝の意を示し、胡桃沢耕史研究家の前田連望氏とともに、そのドラマチックな軌跡を振り返ってみたい。(フリーライター・内海達志)

胡桃沢耕史は魅力的な題材

筆者が前田氏の存在を知ったのは4年前。当時、前田氏は胡桃沢氏の伝記をまとめるため、遺族から閲覧の許可を得た日記を読み進めていたのだが、その中で「さつぼろクオリティ」という雑誌名をたびたび目にした。そこで「あれだけの人気作家が、なぜ25年間も北海道の地方雑誌で書き続けたのだろうか」

と疑問を持ち、編集部に連絡をくれたのである。最初に対応したのは、若手の頃に「胡桃沢番」を任せられていたベテラン編集者のK氏だった。K氏の名前は、日記にも登場していたという。本人は謙遜していたが、胡桃沢氏はK氏の人間性を高く評価していたようだ。

その後、東京を拠点

ダンジャズ研究会のOBで、1つ下にはタモリがいます。その総会を年に1回くらいやっていたのですが、コロ

ナの少し前に参加した際、清水くるみという後輩のジャズピアニストと知り合いました。知人が『あの有名なエ



▲好評を博した「翔んでる警視正」(1993年6月号より)

ロ作家の清水正二郎の娘だよ」と教えてくれたのです。1977(昭和52)年から使い始めた胡桃沢耕史の筆名は、娘のくるみさんと、長男の耕史さんから取ったものだ。家族思いの一面が垣間見える。著作活動をしていた前田氏にとって、かつて一世を風靡した「エロ作家・清水正二郎」は創作意欲を駆り立てられる魅力的な題材であった。これを機に国会図書館通いが始まり、調査と研究に没頭する日々となったのである。さらに、前述のとおり遺族から日記を借りることもできた。毎日ではなかったが、15歳くらいから亡くなる直

にしている筆者が、いつもお世話になっていたK氏から今回の企画に関する取材を依頼され、コロナ禍が明けた昨秋、前田氏が住む横浜市でインタビューが実現した次第である。ちなみに、筆者はフリーになる以前、本誌スタッフとして胡桃沢氏の原稿をワープロで入力する作業を担当していた。実際にお会いしたことはないが、代表作『翔んでる警視正』を、誌面に載る前にワクワクしながら読んでいたのが懐かしい。それにしても、前田氏はなぜ、胡桃沢耕史研究という(失礼ながら)マイナーな領域に足を踏み入れたのだろうか。「私は早稲田大学のモ



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)